

# 知多木綿

木綿は日本の庶民が常用した衣料の中では最もすぐれたものであった。

商品としての知多木綿は、白い無地の織布（反物）であり、江戸やその他の地方へ運ばれ、浴衣や手ぬぐいなど庶民の衣料として利用された。特に晒技術の導入後は、「知多晒」の名で江戸へ移出するようになり、その名を高めた。

知多木綿の生産を支えたのは農家の女性であり、商品として白い木綿を織る一方で、自家用として普段着や仕事着などの縮木綿も織り、「機を織れない者は、嫁に行けぬ」といわれたほどであった。

## —綿から糸へ—

- 綿……………アオイ科の1年生植物。5月上旬前後に種をまき、7～8月に黄色の花が咲く。9～10月頃に青い実が大きくなり、やがてはじけて白い繊維が出る。
- 綿くり……………ろくろを使って、綿を繊維と種に分ける。
- 綿打ち……………綿打ち弓の弦に綿をからませ、槌ではじいて綿をほぐす。
- 糸紡ぎ……………ほぐした綿からよりこを作り、糸車で紡ぐ。糸を引き出す、よりをかける、つもに巻き取る、の作業を繰り返して糸を紡ぐ。
- かせ作り……………つもの木を煮て、よりを止め、かせつくりでかせにする。

## —たて糸の準備—

- 枠巻き……………糊付けしたかせをかせかけにかけ、はやまいを使って糸枠に糸を巻き取る。
- 経る……………経台とメガネを使い、上糸と下糸を分けるあぜを作りつつ、たて糸に必要な本数と長さを整える。経ったたて糸は、へそ巻きにした後、あぜの部分にあぜ竹を通す。
- 箆さし……………箆さしで箆の羽にたて糸を通す。糸を通しやすくするため、箆に箆づかをはめる。
- ちきり巻き…たて糸をちきりに巻き取る。糸がずれないように機くさを入れる。
- かざりかけ…かざり竹を使って、たて糸を上下に分けるためのかざり糸を、たて糸の1本1本にかける。

## — 織る —

この地域では、機織り機のことをはたごと呼んだ。準備したたて糸をはたごに取り付け、調節してから織り始める。昔の人は、1反分の布を2日で織り上げた。

- 管……よこ糸を巻き取るもので、つも（管巻き用）に差し込んで、山形に固く巻く。
- 杼……よこ糸を巻いた管を入れて、たて糸の中をくぐらせて織る道具。すべりやすいように車をつけたものや、竹ひごのかわりに金製のバネをつけ、管の出し入れを簡単にしたものなどがある。
- 伸子……織り幅をそろえるのに使う。
- 早織り……チャンカラともいい、これにより木綿生産の近代化が進んだ。

## — 仕上げ —

織り上がった布は晒した後、砧の上ののせて砧槌で叩き、幅揃えと艶出しをした。

## — 問屋と商い —

江戸には木綿問屋仲間があり、産地の問屋は買継問屋として、その系列に組み込まれていた。買継問屋は、仲買人が各農家から買い上げた木綿を集荷して伊勢へ送り、「伊勢晒」「松坂晒」の名で江戸へと送っていた。

江戸時代の中頃、岡田村の中島七右衛門によって伊勢から晒技術が伝わると、知多木綿は「知多晒」として江戸へ送られるようになり、「伊勢晒」を逆転するまでに生産高を伸ばしていった。

- ぶんごべら…さらし布を畳紙（ぶんご）に入れ、包装するのに使った。
- 木綿売買符…知多木綿の買継問屋が発行した木綿仲買人の鑑札（許可証）。

## — 染色・家織りの製品 —

- 藍がめ……藍染めに使用されていたもので、糸や布を染めた。
- 縞本……古い帳面などに縞木綿のはぎれを張りつけた織り見本。縞本を参考にしたがら、着物や筒袖などの普段着や仕事着を織った。
- こじき袋……乞食をしても家に帰ってくるのではない、と嫁に行く娘に持たせたもので、昔の乞食が袋を使って米などをもらい歩いたことがその名の由来だという。